

研究報告



臨床実習成果に影響を与える学生の意識に関する調査*

芝 寿実子**

【要旨】

臨床実習で過度のストレスにより、実習の進行が妨げられることや、時には中断を余儀なくされることがある。臨床実習でこのような問題が生じる一つの要因として、学生自身が達成感を得られないことが考えられる。

今回、学生の臨床実習に対する考えを明らかにすることを目的に臨床実習に関するアンケート調査を行った。対象は、総合臨床実習を終えた当校の理学療法学科生45名。アンケート調査は、1) 実習成果、2) 積極性、3) 実習指導者(SV)とのコミュニケーション、4) 経験症例数、5) 課題学習量、6) SVの臨床思考過程理解度、7) フィードバック時間の7項目について独自に作成したものを実施し、結果はダミー変数化して重回帰分析を行った。重回帰分析の結果、実習成果は積極性とSVの臨床思考過程理解度に影響されていた($R=0.61, p<0.05, p<0.01$)。また、各項目の相関を見ると、積極性とSVの臨床思考過程理解度は経験症例数と有意な相関関係を示していた($p<0.05, p<0.01$)。

学生は臨床実習に積極的に取り組みSVの臨床に対する思考過程を理解することで、実習成果を得ていることが分かった。また、症例経験数が実習成果に影響を及ぼすと示唆され、臨床実習では可能な限り学生に症例経験を積ませることが望まれる。

キーワード：臨床実習・アンケート・教育

はじめに

臨床実習終了後の学生は、臨床現場での実体験に強い影響を受け実習に対して高い満足度を感じている学生がいる反面、挫折感を得る者や実習に対する満足度が低いと訴える者も少なくない。このような学生の否定的思考を生み出す一つの要因として、臨床実習で達成感を得られないことが考えられる。

これまで臨床実習に関する調査研究は、数多く実施されているが、学生の要望に主眼をおいた報告は意外に少なく、学生が臨床実習の何に満足感や成果を得ているのか、その要因は明らかでない。

学生が効果的な臨床実習を実施するためには、

臨床実習に対する学生の要望について明らかにすることも必要である。

そこで今回、学生の臨床実習に対する考えを明らかにすることを目的に臨床実習に関するアンケート調査を行った。

方法

対象は、当大学最終学年度の臨床実習を終えた理学療法学科生45名(男性32名、女性13名)、平均年齢 21.9 ± 0.7 歳とした。

アンケート調査は、1) 学生自身が臨床実習に対して感じる実習成果(実習成果)、2) 実習指導者(SV)とのコミュニケーション、3) 実習に対する学生の積極性(積極性)、4) SVの臨床思考過程に対する理解度(臨床思考過程理解度)、5) 課題学習量、6) 臨床実習指導者がフィードバックにかかる時間(FB時間)、7) 経験症例数の7項目について、独自に作成したものを実施した(表1)。回答は、5段階

* Investigation on the opinion among university students that effected the achievements in clinical practice

** 星城大学リハビリテーション学部理学療法専攻
Sumiko Shiba, RPT, MS

表1. アンケート用紙

		回答欄
1.	今回の臨床実習の内容についてどのように感じましたか？ ①非常に成果が得られた ②やや成果が得られた ③どちらでもない ④やや成果が得られなかった ⑤成果が得られなかった	1
2.	実習に取り組む自分自身についてどのように感じましたか？ ①非常に積極的にできた ②積極的にできた ③どちらでもない ④やや積極的にできなかった ⑤積極的にできなかった	2
3.	スーパーバイザーとの関係についてどのように感じましたか？ ①非常にコミュニケーションがとれた ②コミュニケーションがとれた ③どちらでもない ④コミュニケーションがややとれなかった ⑤コミュニケーションがとれなかった	3
4.	スーパーバイザーの臨床思考過程についてどのように感じましたか？ ①非常に理解できた ②理解できた ③どちらでもない ④やや理解できなかった ⑤理解できなかった	4
5.	経験した症例の数についてどのように感じましたか？ ①非常に多い ②多い ③適正 ④やや少ない ⑤少ない	5
6.	今回の実習で経験した症例数を記入して下さい(見学のみは含まない)。	6 人
7.	レポートやディリーノートなどの課題学習についてどのように感じましたか？ ①非常に多い ②多い ③適正 ④やや少ない ⑤少ない	7 時間分
8.	フィードバックの時間についてどのように感じましたか？ ①非常に長い ②長い ③適正 ④やや短い ⑤短い	8 (ア)
9.	1回に費やしたフィードバックの時間を具体的に記載してください。	9 (イ)
10.	臨床実習の学習形態を臨床学習、課題学習、自己学習の3つに分類した場合、臨床実習全体を通してあなたが各々に努力した割合を全体が10割になるように整数で記載してください。	10 (ウ)

(ア) 臨床実習 (イ) 課題学習 (ウ) 自己学習 (ア)+(イ)+(ウ) = 10

の選択肢を用い、結果をダミー変数化した。“非常にある”=5，“ある”=4，“どちらでもない”=3，“ややない”=2，“ない”=1など、名義尺度データにダミー変数を導入し、重回帰分析を行った。アンケート調査の結果は、実習成果を目的変数とし、その他のアンケートの6項目を説明変数として、重回帰分析を施し、学生が臨床実習の何に成果を得ているかを分析した。その他、各項目の関連を検討するため、相関分析を行った。

また、学習形態を臨床学習、課題学習、自己学習の3項目に分類し、臨床実習を通して学生がそれぞれに努力を注いだ割合(学習努力配分)を全体が10割になるよう回答を求めた。最後に、自由記載欄を設け、臨床実習について個人の自由な意見を求めた。

倫理的配慮

対象者に研究の趣旨を詳しく説明し、インフォームドコンセントを得た上でアンケート調査を実施した。また、アンケート調査用紙には、個人を特定できる情報の記載欄は設けないよう個人情報の取り扱いに配慮した。

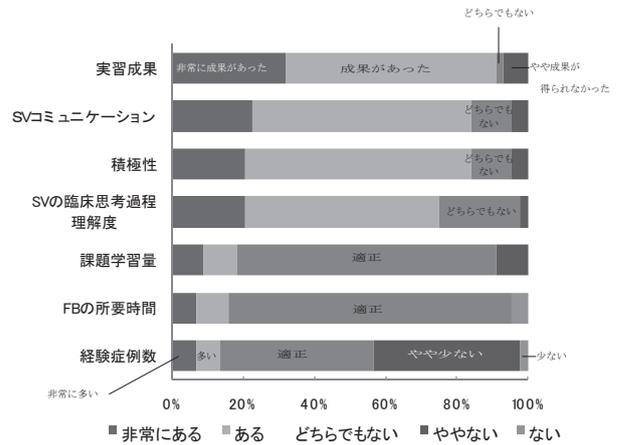


図1. アンケート調査結果の概要(全体)

結果

アンケート回収率は97.8%であった。結果を図1に示す。ほとんどの学生が実習に成果を得ており、「非常に成果があった」、「成果があった」が、90.9%であった。「どちらでもない」が2%、「やや成果が得られなかった」は6.8%であった。SVとのコミュニケーションはほとんどが良好であったが、15.9%が「やや困難」であった。実習に積極的に取り組んでいた学生は84.1%であったが、15.9%は「どちらでもない」、「やや欠ける」と回答した。臨床思考過程理解度は「非常に理解できた」、「理解できた」が75.0%、「どちらでもない」、「やや理解できなかった」が25%であった。課題学習量は「適正」が最も多く72.7%、「非常に多い」、「多い」が18.2%、「やや少ない」が9.1%であった。経験症例数は約半数近くの43.2%が「少ない」と回答した。FB時間は「適性」が最も多く79.5%、「非常に長い」、「長い」が15.9%、「非常に短い」が4.5%であった。

アンケート調査を重回帰分析で統計処理した結果、実習成果に影響を与える因子は積極性と臨床思考過程理解度であった(実習成果の回帰によるモデル値=0.97+0.47×積極性+0.331×臨床思考過程理解度, $R=0.61, p<0.05, p<0.01$) (図2)。また、積極性と臨床思考過程理解度は症例経験数と有意な相

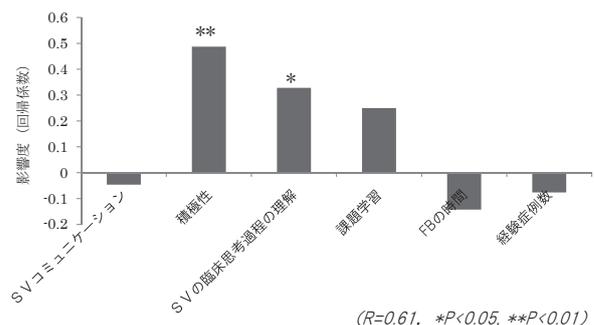


図2. 臨床実習成果に影響を与える因子

表2. 各アンケート項目の相関関係(単相関行列)

	実習成果	SVのコミュニケーション	積極性	SVの臨床思考過程理解	課題学習	FB所要時間	経験症例数
実習成果	-----						
SVのコミュニケーション	-0.0065	-----					
積極性	0.4609 **	0.0445	-----				
SVの臨床思考過程理解	0.3490 *	0.2215	0.0893	-----			
課題学習	0.2785	-0.0959	0.0000	0.3328 *	-----		
FB所要時間	-0.1206	0.2541	-0.1328	0.2353	0.1272	-----	
経験症例数	0.2939	-0.0624	0.3643 *	0.4026 **	0.5038 **	0.1952	-----

* $P < 0.05$, ** $P < 0.01$

相関関係を示した ($p < 0.05, p < 0.01$) (表2).

臨床実習に対する学習努力配分の割合は、臨床学習に6割の努力を費やした学生が最も多く36.4%であり、6割、7割、8割と回答した者の合計は62.3%と半数以上が臨床学習に最も努力を費やしていた。課題学習では2割と回答した者が最も多く50%であった。臨床学習より課題学習に努力配分していたのはわずか1名であるが、6割と回答していた(2.3%)。自己学習については1割が最も多く43.2%、次いで多かったのが2割で36.4%であった(図3)。

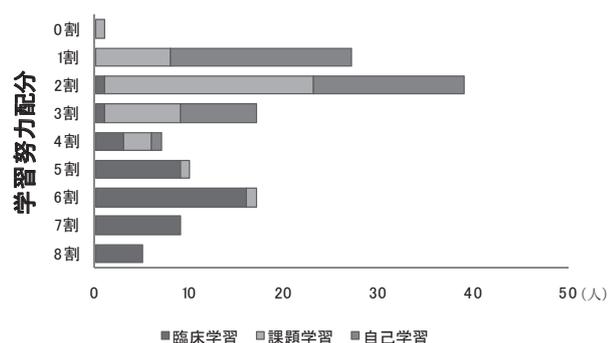


図3. 臨床学習, 課題学習, 自己学習における学生の学習努力配分

考察

今回の調査により、学生は臨床実習に積極的に取り組み、SVの臨床思考過程を理解することで実習の成果を得ていることが解った(図2)。また、経験症例数が多いほど、積極性と臨床思考過程理解度は高まり、学生は実習成果を得られることが示唆された(表2)。

1) 実習成果

実習成果については、90.9%が臨床実習に成果を得たと回答している。自由記載欄には「臨床視点でのアドバイスが頂け勉強になった」、「見学の時には多くのことを教えて頂き成果ある実習でした」などの意見がみられた。結果から、当校の臨床実習において、学生は一定の成果を得

ていることが理解できる。

しかし、わずかながら成果を感じていない学生が存在する。実習成果を感じることができなかった学生の個々のデータを観察してみると、全員が経験症例数に対して「少ない」と回答していた。

今回無記名でアンケート調査を行ったため詳細を追うことはできないが、臨床実習ではこのような実習成果を得られない学生が問題となる可能性が高いと思われる。

今回の調査で、症例経験数は臨床実習の成果に直接影響を及ぼす要因として検出されなかったが、積極性と臨床思考過程理解度と相関みられ、間接的に実習成果に影響することが示唆された(表2)。学生に一定の成果を与えるには、可能な限り経験の機会を与えることが重要であると思われる。

2) SVとのコミュニケーション

医療人としての資質の育成や円滑な実習の実施にはSVの担うところが大きく、SVとのコミュニケーションは非常に重要であると思われる。実際、実習の満足感は、指導者とのコミュニケーションの手応えにより高まる傾向が得られたとの報告も聞かれる¹⁾。本調査でもSVとのコミュニケーションが実習成果に影響するものと予測していた。しかし、今回の我々の調査ではSVとのコミュニケーションは実習成果に影響を与えないものであった(表2, 図2)。

3) 積極性

大半が積極的に実習に取り組んでいたが、5.9%が「どちらでもない」、「やや不足」と回答している(図1)。積極的に取り組めなかった理由として、SVとの人間関係が不良であることや施設に馴染めない等のコミュニケーションの問題が考えられた。しかし、5.9%の「どちらでもない」、「やや不足」と回答した各個人のデータを確認すると、SVとのコミュニケーションについては寧ろ良好であった。しかし、経験症例数はやや少ない傾向にあった。経験症例数と積極性には相関関係が認められ、学生は経験を重ねることにより積極性を高めていくのではないかとと思われる(表2)。

4) 臨床思考過程理解度

臨床実習では学内教育で学習した内容を実践の場で応用し、生きた知識・技術として習得することが重要である。多くの患者を経験してい

るSVの臨床思考過程を理解することは、臨床の理解を深めることであり、当然のことながら実習成果に影響したともと考えられる(図2)。

5) 課題学習量

昨今、多くのレポートを課すことや書き物中心の実習は臨床教育として相応しくないと、盛んに議論されている^{2,3)}。今回の自由記載欄でも、「レポートの量が多く担当患者さんの事前準備がおろそかになってしまうと感じた」、「レポートのために睡眠時間が減り実習に影響が出た」など否定的な意見がみられた。しかし、意外にも課題学習量は、臨床思考過程理解度と正の相関関係が認められている(表2)。課題により知識や思考の確認および整理ができること、また症例レポートでは患者の情報収集に始まり治療から最終評価に至るまで系統立てて作成されることから、課題学習によりさらに理解が深まるのかもしれない。

臨床実習そのものに影響を与えてしまう過剰な課題学習は、本末転倒であり避けられるべきである。しかし、一方では全く課題が出されないといったことも聞かれる。

今回の調査結果において、課題学習は実習成果に直接影響を与えなかったものの臨床思考過程理解度と関連がみられている(表2)。適度な課題学習は臨床実習に有効であると思われ、今後課題学習のあり方についても検討が必要であると考えられる。

6) 経験症例数

経験症例数は、学生の約半数が少ないと感じている(図1)。また、学生の学習努力の大半は臨床学習に費やされており(図3)、自由記載では、「見学の時間がほとんどなく充実した時間を過ごせた」、「患者さんにふれる機会が多くよい実習であった」、「見学が多いと時間がもったいないような気がした」などの意見が記されている。

学生の学習努力配分や意見から理解できるように、学生は見学型より参加型の指導を求めている。

経験症例数は積極性と臨床思考過程理解度と相関がみられることから、多くの症例を経験することは、臨床実習の成果に肯定的な影響を与えると考えられる。

7) FB時間

調査結果では、FB時間は「適正」が最も多く、

記載のあった中では30分～1時間が最も多かった。しかし、実習生が適正と感じる時間の幅は様々で、2時間の長いと思われる時間でも「適正」との回答があり、また10分の短いと思われる時間でも「適正」とする回答が見られた。FB時間が「非常に長い」、「長い」の回答は15.9%みられ、最大は2時間以上であった。ヒトの集中力の持続時間は15分～90分が限界といわれており、長すぎるFBは実習生を疲弊させてしまい、かえって理解されないのではと懸念する。しかし、「非常に長い」と回答したものが、自由記載欄には「SVの意見がよく理解できてよかった」と肯定的な意見を述べていた。各個人が感じる適正時間はFB方法や内容に左右されるのかもしれない。

臨床実習の目的は、医療専門職として必要な技術を培い、患者を理解することにある。教科書や文献的知識だけでなく、現場での思考法や技術の習得は、実際の患者を通じた臨床場面でしか経験できないことであり、体験型の臨床実習が望ましいことは、誰の目にも明らかである。また、学生自身も症例経験を繰り返すことによって臨床現場での思考法を習得し、実習成果を得ていることが今回の調査により示唆された。

しかし、質の高い医療サービスが求められるなか、これまでの臨床実習の形態では無理が生じてきており、学生が経験する症例数は減少傾向にあるといわれている⁴⁾。実際、本調査でも学生の約半数は症例経験数が少ないと回答している(表2)。

医療サービスの形態そのものが変化しつつある昨今、従来の臨床実習を継続していくことは難しい。効果的な臨床実習を行うには、今後臨床実習のあり方について、再考する必要があると思われる。

まとめ

- 1) 実習成果に影響を与える因子として積極性と臨床思考過程理解度が得られ、学生は臨床実習に積極的に取り組み、SVの臨床思考過程を理解することで実習の成果を得ていることが解った。
- 2) 積極性と臨床思考過程理解度は経験症例数と相関がみられ、多くの症例を経験することによって、臨床実習の成果が高まることが示唆された。

【文献】

- 1) 加藤宗規：臨床実習で何が学生の動機づけに影響したか。全国私立リハビリテーション学校連絡協議会 11: 24-26, 2006.
- 2) 荻島久裕：学生と臨床実習指導者間に生じる

- 問題とその回避方法. 理学療法 22(7): 1025-1030, 2005
- 3) 渡辺京子, 西潟央: 臨床実習受け入れ側から教育現場へ望むこと. 理学療法 23(8): 1177-1183, 2006.
- 4) 杉浦昌巳, 村上忠洋, 畑迫茂樹, 田中和彦, 海野光信: 臨床実習の実態調査. 全国私立リハビリテーション学校連絡協議会 11: 30-32, 2006.
- 5) 後藤清江: 臨床実習指導者および学生の資質. 理学療法学31(4): 241-243, 2004.
- 6) 日本理学療法士協会教育部編: 臨床実習教育の手引き 第5版. 日本理学療法士協会, 2007